発寒ひかり保育園だより

2021年
8月号

巻頭言

8月は私たち日本人にとって、平和について深く考える特別な月です。

先日、12年前の卒園生たちに連絡をとったときに、命の大切さや戦争の悲惨さを知ってもらおうと、数々の戦争絵本を読んだことを覚えているか尋ねました。

「記憶にある絵本は『かわいそうなぞう』」「生の写真（原爆の焼野原が載った紙芝居）が怖かった」「小さい頃にそういう話をたくさん聞けて良かった」などの声が聞かれ、当園の「いのち・平和育」の取組の一部が、それぞれ平和について考えるきっかけになっていたようです。

今年も沖縄の慰霊祭が開催されました。中学2年生の上原美春さんの平和の詩の一部をご紹介します。

（略）この空はきっと覚えている／母の子守唄が空襲警報に消された出来事を／灯されたばかりの命が消されていく瞬間を／（略）踏みしめるこの土は覚えている／まだ幼さの残る手に、銃を握らされた少年がいた事を／おかえりを聞くことなく散った父の最後の叫びを／（略）凛と立つガジュマルが言う／忘れるな、本当にあったのだ／暗くしめった壕の中が／憎しみで満たされた日が／本当にあったのだ／漆黒の空／屍を避けて逃げた日が／本当にあったのだ／（略）（裏面に全文掲載）

「忘れるな」という言葉が胸に刺さります。この詩の全文を読んだとき、今を生きる私たちの手で平和な世を実現するため、戦争の記憶を忘れず、次世代に未来へのバトンをつなごうという、熱い想いを感じました。

子どもたちが、自分たちで平和について考えられるように、種をまき続けたいと思います。

主任保育士　家村　維人

みるく世の謳（うた）

宮古島市立西辺中学校二年　上原　美春

初めて命の芽吹きを見た。
生まれたばかりの姪は
小さな胸を上下させ
手足を一生懸命に動かし
瞳に湖を閉じ込めて
「おなかすいたよ」
「オムツを替えて」と
力一杯、声の限りに訴える

大きな泣き声をそっと抱き寄せられる今日は、
平和だと思う。
赤ちゃんの泣き声を
愛おしく思える今日は
穏やかであると思う。

その可愛らしい重みを胸に抱き、
6月の蒼天を仰いだ時
一面の青を分断するセスナにのって
私の思いは
76年の時を超えていく

この空はきっと覚えている
母の子守唄が空襲警報に消された出来事を
灯されたばかりの命が消されていく瞬間を

吹き抜けるこの風は覚えている
うちなーぐちを取り上げられた沖縄を
自らに混じった鉄の匂いを

踏みしめるこの土は覚えている
まだ幼さの残る手に、銃を握らされた少年がいた事を
おかえりを聞くことなく散った父の最後の叫びを

私は知っている
礎を撫でる皺の手が
何度も拭ってきた涙

あなたは知っている
あれは現実だったこと
煌びやかなサンゴ礁の底に
深く沈められつつある
悲しみが存在することを

凛と立つガジュマルが言う
忘れるな、本当にあったのだ
暗くしめった壕の中が
憎しみで満たされた日が
本当にあったのだ
漆黒の空
屍を避けて逃げた日が
本当にあったのだ
血色の海
いくつもの生きるべき命の
大きな鼓動が
岩を打つ波にかき消され
万歳と投げ打たれた日が
本当にあったのだと

6月を彩る月桃が揺蕩（たゆた）う
忘れないで、犠牲になっていい命など
あって良かったはずがない事を
忘れないで、壊すのは、簡単だという事を
もろく、危うく、だからこそ守るべき
この暮らしを

忘れないで
誰もが平和を祈っていた事を
どうか忘れないで
生きることの喜び
あなたは生かされているのよと

いま摩文仁の丘に立ち
私は歌いたい
澄んだ酸素を肺いっぱいにとりこみ
今日生きている喜びを震える声帯に感じて
決意の声高らかに

みるく世ぬなうらば世や直れ
平和な世界は私たちがつくるのだ

共に立つあなたに
感じて欲しい
滾（たぎ）る血潮に流れる先人の想い

共に立つあなたと
歌いたい
蒼穹（そうきゅう）へ響く癒しの歌
そよぐ島風にのせて
歌いたい
平和な未来へ届く魂の歌

私たちは忘れないこと
あの日の出来事を伝え続けること
繰り返さないこと
命の限り生きること
決意の歌を
歌いたい

いま摩文仁の丘に立ち
あの真太陽まで届けと祈る
みるく世ぬなうらば世や直れ
平和な世がやってくる
この世はきっと良くなっていくと
繋がれ続けてきたバトン
素晴らしい未来へと
信じ手渡されたバトン
生きとし生けるすべての尊い命のバトン

今、私たちの中にある

暗黒の過去を溶かすことなく
あの過ちに再び身を投じることなく
繋ぎ続けたい

みるく世を創るのはここにいるわたし達だ

（県平和祈念資料館提供）